『まんじ』101 号(2006.8)

過激な夫婦と品格

新井　宏

このところ海外旅行には、もっぱらU社の十五日間ツアーを利用している。やや費用がかさむ欠点はあるが、それでも個人で出かけるよりかなり割安であり、また格安ツアーのようにどこに行っても日本人ばかりと言うこともない。時間に余裕がある分、勝手に周辺を歩き回る楽しみもある。我が家の企画担当に言わせれば、実質的な観光の日割計算ではむしろ格安ツアーよりも割安な場合もあるのだそうだ。

ところで、U社のコースを利用しているのにはもうひとつの理由がある。いやこちらの方があるいはウエイトが高いのかも知れない。それは十五日間にわたり擬似的な夫婦単位の社交が楽しめるからである。

ご承知のように、上流階級はいざ知らず、日本には夫婦単位の社交の習慣がない。職場や近所付合い、趣味などの付合いは基本的には個人単位であり、複数の夫婦の社交の場とはほど遠い。その中で、コースや日程、費用の関係もあろうが、おおむね似通った背景を持つ夫婦が五組から七組ほど参加するU社のツアーは、十五日間の昼食や夕食時には、たいていお酒も入り、ちょっとした社交場の雰囲気なのである。初対面なので話題ひとつ選ぶにも若干の緊張感があるが、その内にいろいろと見えて来る。

ひとことで言えば、夫婦というものは実に多様だということだ。結婚して初めて味わった出身家庭間のカルチャーショックがここでも再現される。

南スペイン旅行のため、マドリッドの王宮に立ち寄った時のことだ。

「パンプローナの写真、撮っとけ」

と、女性の声が響いてきた。スペイン各地を紹介した画の中にパンプローナのものがあり、それをご主人に撮るように言った場面であった。それにしても、わがツア

ーのご婦人には相応しくない物言いであるが、ご主人は唯々として指示に従っている。

後で知ったことであるが、ご主人は大手自動車メーカーの役員を勤め、パンプローナ(バスク地方の主要都市で牛追い祭りで有名)にある子会社の社長も経験した方で、職場では大変な権限をふるった方だという。

いわば社長令夫人が、ご主人に向って

「もう連れてこないよ」

とも言っている。それでもご主人はにこにこしている。

まあ不思議なご夫婦であるが、奥様の話によると、現役時代のご主人が大病を患ったとき、群がる見舞客を一切シャットアウトし、命を救ったのは自分だと威張っている。ご主人の苦学時代に働いて助けたばかりでなく、ご主人の弟さんの奨学金まで面倒を見たとも言う。それらの話がまったく違和感なく伝わってくるのがこのご夫婦の品格である。

また、ハンガリーのブタペストでは、朝の散歩時にこんな場面にも出くわした。前を歩くご夫婦がどちらへ行くかでもめていた。

ご主人「間違っていたらぶっとばすぞ」

奥様も負けずに「違っていたらけっとばすわよ」

ご夫婦ともになかなかのインテリで、食卓では話しが弾むのであるが、この過激さはなんとしたものであろうか。

そうかと思うと、ふたりだけなのに、ていねいな敬語を使って話しあっている夫婦もいる。喧嘩をする時も敬語をつかうのであろうか。それとも喧嘩なんぞとは無縁なのであろうか。

食事時の共通の話題と言えば、嫁姑や親の介護をめぐる問題もしばしば登場する。時には、深刻な話のはずなのに、実に明るくおおらかに、そして過激に語る奥様たちに、ご主人方はただただにこにこして聞いているのが大勢である。おおむね過激さでは女性軍が勝るという意外な結果である。

ところで、我が家で最も受けている過激な夫婦は、何といっても新田次郎と藤原ていである。

藤原ていが幼子をつれて満州から引上げてきた時の感動のベストセラー『流れる星は生きている』を昭和二十四年に出版した直後のことである。彼女の収入は気象台の課長補佐の新田次郎の給与の十倍以上にもなり、映画化の話も飛び込むなど、周辺はにわかにあわただしくなった。それが面白くない新田次郎は、出入りする出版や映画関係者の対応にてんてこ舞いな彼女がお茶を頼んでも頑として応じない。

「いつ私がいばりましたか」

「毎日だ」

「お父さんはひがんでいるのですよ」
「何をいう。人をバカにしやがって」……「うるさい。お前の顔も見たくない」
その頃、大学を出ていない新田次郎は課長になれず、事情を知らぬ長男の正広が課長職以上の家庭の子供たちで構成する野球チームに参加できずに泣いて帰ってきても「お前は男だ。泣くな」と抱いてやるしかなかった。そして小さな隣室に閉じこもって密かに何かを書き始めた。それが第三十四回の直木賞受賞作『強力伝』である。
知らせがもたらされた時、新田次郎は藤原ていに原稿用紙を片手に
「ざまあみろ」
といって渡した。これが我が家でたいへん受けているのである。
ところが、この発言は藤原ていが語る『わが夫新田次郎』の中にはどうしても見つからない。どうも彼女がテレビで語った言葉らしい。それが何ともすがすがしい夫婦愛として聞こえてくるから不思議だ。
過激と言えば、ふたりの間の次男坊、藤原正彦も似ている。正彦は数学者であるが、両親から受継いだ文才もあり、素晴らしいエッセイ『若き数学者のアメリカ』や『心は孤独な数学者』などで知られている。しかし最近では『国家の品格』を書き、いわば親子三人でベストセラーを競っている。写真を見ると、風貌は新田次郎そっくりである。文体はどこか理系的で、私の文章のリズムと似かよったところもある。だから日ごろ艶や香りのある文章を書けずに劣等感を味わっている私にとっては自信を与えてくれる貴重な作家なのである。
その藤原正彦が『国家の品格』のなかで、「品格なき筆者による品格ある国家論」と前置きしながら、「強い者が弱い者ぶん殴っちゃいかん」と教える新田次郎の言葉に続いて、彼の奥様について
「現実には、ぶん殴りたくなるような女は世界中に、私の女房を筆頭に山ほどいる」
などとのたまうのである。我が家ではとてもこうは行かない。
一方の奥様も、正彦が「もちろん私ひとりだけが正しく、他のすべての人々が間違っている」と彼の確信を披露すると、「(彼の)話の半分は誤りと勘違い、残りの半分は誇張と大風呂敷」と応じるのである。
その正彦は『流れる星は生きている』の最も感動的な場面で次のように描かれている。
私は正彦を見てぞっとした。パンツをはいてない下半身は紫色になり唇は黒ずんで私に向ってもう何もいうことができなかった。はげしく身ぶるいしている両手か

ら雫がぽたりぽたりと音をたてていた。

「お母ちゃん、正彦ちゃんが寒いって」

正広は私の顔を見ていった。その正広自身もぶるぶる震えていたが、正彦をこうさせたのが兄としての責任でもあるかのごとく、私にいっているのであった。

正彦はもうすぐ駄目になる瞬間であった。

何度読んでも、私のような無感動な男でさえ思わず涙ぐむ情景表現である。その母にしてこの正彦ありなのであるが、その正彦は『国家の品格』で「論理よりも情緒、英語よりも国語、民主主義よりも武士道精神」を強調するのである。

純粋論理の世界である数学においても、「論理ですべてに決着をつけることはできない」と「数学的に」証明されているのだそうであるが、論理よりも情緒をというのは母の影響であり、一方、武士道精神は四書五経の家庭に育った父から卑怯を忌む精神と共に徹底して叩き込まれたものである。

この藤原正彦の主張を受けて、私流に若干つけくわえるなら、借り物で飾り立て見栄を張る国家は品格に劣り、借り物の幼稚な正論を振り回す社会は品格に欠けるとなる。それは私が韓国の最近の風潮について日ごろ感じていることなのである。そしてその典型を韓国の英語熱と盧武鉉大統領の行動に見る。

何しろ英語狂いの国である。韓国の宗教は何か問えば「英語」と答えれば正解である。英語にすがっていれば心がやすまるからである。だから親たちは貧困生活に耐えながらも子供たちを中学や高校の内から海外に送り出し、小学校から英語教育を義務化しようと言い出す。韓国国内で博士号なんか取っても何の役にもたたないと優秀な学生ほどみんな海外に留学してしまう。そしてその結果、大した内容もないのに、流暢に英語をしゃべって見せ、英語の下手な者を見下す連中が増える。これでは韓国の大学院のレベルが高くなるはずはない。

藤原正彦は理数系に似あわず英語の成績が抜群であったが、米国に渡っておどろいた。米国人はみんな自分より英語がうまいと。本心から言っているわけでもあるまいが、ここが親父ゆずりの自信家、正彦らしいところである。その正彦は基礎教育では英語よりも国語をと力説する。まったく同感だ。幼児の英語教育など百害ばかりだ。

第一、英語のうまい国は、米国や英国など英語国を除けば、後進国ばかりではないか。自国語の確立もできず、高等教育では英語の教科書を使用せざるを得なかっただけではないか。それなのに韓国は、漢字を捨てハングル化したのはまだしも、韓国語を捨てて英語にしようとしている。先進国のあとをわき目も振らずにまっしぐら

に追いかけている時には英語遣いの意味もあったであろうが、先進国の一角に頭をもたげた現在、これから求めなければならないのは独自の技術や文化である。借り物の英語では絶対に米国を追い越せない。言語はコミュニケーションの手段でもあるが、論理思考の最大の武器なのである。国語を大事にしないことには論理思考力の高揚など望めるわけがない。

現に韓国の学生たちが、しばしば英文を直してほしいと言って来るが、いつも英語より韓国語をという話になってしまう。第一私に英語を見てくれというのがおかしいのだが、多少しゃべれる学生でも書く方はたいしたことがないので、気軽に引き受ける。ところがどうしても意味がとれないので、韓国語をもって来るように言うと、これがまたとんでもない代物なのである。私の韓国語の方がはるかに品格高いと自信持っていえる。言葉は論理思考の武器である前に、論理思考的でなければならないのだが、論理構成がめちゃくちゃなのである。いくら母国語に堪能でも論理的な文章がかけるわけではない。かくして外国人に韓国語をけなされるほど、韓国語レベルは低下しているのである。

同じような意味で、黄禹錫教授のBS細胞事件も韓国の見栄が傷を大きく拡げてしまった例である。いまだにノーベル賞を持たない韓国がそれを熱望するのは当然としても、勝手にノーベル賞をとったかのように騒ぎ立て、疑惑には徹底して目をつぶろうとしたのは、中身よりも外見を気にする昨今の風潮である。ワールドカップの熱狂だって同じ脈絡上にある。だから品格に欠けると写るのである。

それが政治面に現れると盧武鉉大統領を生む。何しろ、既成政党を批判しまくって政権についたグループである。批判や幼稚な正論には長けていても何しろ深みがない。にわか作りの借り物の知識で右往左往しては、最大の若年支持層まで失い、人気回復に国民受けの良い外交強硬路線を持ち出している。これは本来「禁じ手」である。「禁じ手」を使うのは最も品格に欠ける行動である。

国の長期的な利害関係を調節する外交交渉は、如何にして現実的な果実を得るかが目的であり、勇ましいことを言って国内的に人気を取れば、いずれそれが足かせになって、失うものが多くなるのは歴史を見るまでもない。野党やマスコミが勇ましいことを言うのならまだしも、国の最高責任者自らがそれを言い出したら支離滅裂で、品格に欠けることおびただしい。対日強硬姿勢や東アジア調停者論では、一時的な人気を取れても、国際的に、あるいは韓国内でも識者間では極めて評判が悪いのである。

礼訪国に出かけては「日本の無法」を「いいつけ」て得々としているが、実は失笑を買っているだけなのであ

る。北朝鮮を手なずけたかのように国民の前でふるまっては、いつも煮え湯をのまされている。そういえば暴力団のように肩を揺すって歩く癖の盧大統領の顔まで品格に欠けるように映ってくる。

同じ意味で言えば、小泉首相の靖国神社参拝もいただけないが、それを美学として譲らない点だけは借り物とも思えず救いがある。まあ総体的にみれば、昨今の日本はまだ韓国よりもましだということであるが、小学校から英語教育をという動きは日本にもあるという。

英語が多少しゃべれたからと言って国際人になれるわけではない。国際人とは自分たちの文化を相手国の文化と比較して意見を持っている者のことである。相手から「どうして日本では武家政権が朝廷をほろぼさなかったのか」とか「どうしてキリスト教をうけいれなかったのか」とか聞かれて、何も言えないようでは失格である。

藤原正彦もいうように、意地悪な国際人は「漱石の「こころ」の先生の自殺と三島由紀夫の自殺とはどんな関係があるのか」などと言って値踏みをするものなのである。その時まともに答えられなかったらシェクスピアの四大悲劇のことでも質問すればよい。これが国際人のゲームなのである。

過激な夫婦の話が、国家の品格の話になってしまった。韓国のことに話が及ぶとつい力が入ってしまう。そもそも、品格に欠ける(と自称する)藤原正彦が国家の品格などについて、巧みに描いてみせたのがいけないのだ。「写真とっとけ」「もうつれてこないよ」と語る奥様が、恵まれぬ子供達の支援に力を注いでいるのを見て、見かけの品格と真の品格とは何の関係もないと書こうと思っている内に、どこか見栄っぱりな韓国が、品格ない国家のように思えて義憤を覚えてしまったのだ。

ところで、韓国がむかしから見栄っ張りだったかと言えばそうではない。建前とは異なり韓国の女性は気が強く、そのため伝統的に夫婦仲は過激である。とても日本では想像できないほどおおっぴらに夫婦喧嘩をする。わが愛すべき過激な夫婦も、あるいは韓国の血筋を受継いでいるのであろうか。そういう夫婦に興味を示す我が家は予備軍たり得るだろうか。